氏　　名	鈴 木 貞 美
学位（専攻分野）	博士(学術)
学 位 記 番 号	総研大乙第33号
学位授与の日付	平成９年３月２４日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学 位 論 文 題 目	梶井基次郎研究
論 文 審 査 委 員	主　査　教　授　千田 稔
	教　授　芳賀 徹
	助教授　井上 章一
	名誉教　杉本　秀太郎（国際日本文化研究センター）
	教　授　吉田　熙生（城西国際大学）

論文要旨

評伝『梶井基次郎　表現する魂』が本研究の主論文にあたる。作家、梶井基次郎の生涯を辿りながら、時代環境や読書経験を考察、そこから受けた様ざま影響やそれらに対する姿勢を明らかにしつつ、習作期からの作品の読解と鑑賞を行い、梶井基次郎作品史の展開と作品群の文芸史上の位置を明らかにする。評伝という形式は、ひとりの作家の境涯と彼が残した作品群について、読解や影響関係、文芸史上、文化史上の位置の解明などの研究を総合し、集約する形態として最もふさわしいものと考える。

次に、本研究の特徴と骨子を以下五点にわたって概略する。

1、梶井基次郎の伝記的な事実について。

従来より重ねてきた基次郎の兄弟や友人らへのインタヴュや新資料の掘り起こしによって、既刊の回想、伝記研究類を大幅に補った。このうち、新資料とは、梶井基次郎の中学時代の作文、東京帝国大学在学中から満三十一歳で結核で亡くなるまでの梶井基次郎に兄事し、のち、フランス文学者として活躍の傍ら、数次にわたる梶井基次郎全集の編集に携わった淀野隆三の若き日の「日記」などをいう。（それらの伝記的記述を裏づける戸籍、家系、成績表、転居先や作品の背景となる地図や風景写真などを、参考資料として付す）

2、読書、美術鑑賞など思想・芸術経験の掘り起こし

梶井基次郎のノートや友人宛の書簡に記載されている書物や雑誌掲載作品、展覧会鑑賞などの記録などはもちろん、中谷孝雄、三好達治ら友人たちの回想、上記の淀野隆三の「日記」などに登場する作家、詩人らの作品を逐一検討し、夏目漱石の作品・評論、ドイツ観念論や海外の新しい心理学、大正期の阿部次郎や西田幾多郎らの思想、谷崎潤一郎や佐藤春夫の作品・評論、また、萩原朔太郎の詩や松尾芭蕉の俳諧、ボードレールの散文詩、社会主義思想や『プロレタリア文学」など、従来より指摘されてきた影響の範囲を大幅に拡大し、さらに、梶井基次郎独自の受け止めと変換を考察、具体的かつ蓋然性の高い判断を行った。

3、文化状況の考察

上記の作業は、梶井基次郎を取り巻く思想や文化的環境、時代状況の考察を拡大深化することにより、はじめて瑣末な影響論を脱した総合的な判断が可能になる。京都の第三高等学校で理科の生徒だった梶井基次郎は、大正教養主義と呼ばれる知的青年一般を巻き込んだ哲学熱、芸術熱のただ中から創作を開始し、ほとんど無名のままに没した。彼を取り巻く環境は早くから文芸の途を志した文学青年や新人作家として活躍を開始する作家たちよりも、当時の知的青年たちの一般に近いといえよう。逆にいえば、彼の残したノート、書簡などに現れる書物や美術や音楽などは、大正期半ばから昭和初年代にかけて青年たちの置かれた思想や文化状況を掘り下げる手掛かりとして、かなり有効なものといえる。

梶井基次郎プロパーの研究が切り開いてきた成果だけではなく、大正生命主義の思潮、震災後の「モダン都市」の文化状況の掘り起こしなど、この十年余りの間に飛躍的に進んだ大正、昭和初年代の思想、文化状況の解明の成　果を積極的に取り入れ、逆にそれらを照らし返す叙述を心掛けた。（とくに日露戦争後から関東大震災までの哲学、社会思想、自然科学、芸術理

論の全般に働いた「大正生命主義」と、その関東大震災以降の変容の概要については、この数年、鈴木が中心になって開拓してきたアスペクトによる研究に負うところが大きい。この研究のとりあえずのまとめを副論文として添え、理解の助けとする。）

4、梶井基次郎の表現の独自性の解明

こうした思想・文学・文化全般にわたる影響関係の重視は、逆に梶井基次郎という作家が書いた作品の独自性を浮き彫りにするためのものでもある。志賀直哉の思想や文体、佐藤春夫の作風や『「風流」論』の文芸思想の影響について、その相対的な強さを明らかにしつつ、梶井基次郎がそれとは異なる作風を築きあげたゆえんはどこにあるか、一例をあげれば、彼がレモンを「檸檬」と表記しなければならなかった理由を、表現の効果を強く意識する芸術観に求めた。その内実を谷崎潤一郎の表現論などと比較しつつ、大正期の芸術理論の根幹をなす「生命の表現」という理念からのいち早い離脱と理論化した。それによって横光利一らのいわゆる「新感覚派」の表現との共通性と差異を明確にすることを試みた。

5．作風の変遷と文芸史的位置の解明

梶井基次郎の思想や精神のあり方の解明は、作品のモチーフの分析を基本とする。個々の作品のモチーフを、『檸檬』から『ある心の風景』には憂鬱からの解放を、『雪後』には生活を背負って黙々と生きることの倫理を、『冬の日』には死の覚悟、断念による明るさを、湯ケ島における作品群には自身の精神を客観化する強さの獲得を読みとる。そのようにして、モチーフの変化を跡づけ、あわせて、方法、とくに構成法に現れる方法の変化に着目した。『檸檬』における五官の感覚の立体法、『城のある町にて』の微妙すぎるほどの光や性の意識の記述の配置、『Kの昇天』『ある崖上の感情』の探偵小説的な手法、『桜の樹の下には』の性と死のイメージの乱舞、『闇の絵巻』『交尾』『愛撫』などの晩年の随想的な作風、『のんきな患者』における主人公の心理から個人的生活へ、社会的視野へと視点の広がりを示す手法など、方法的変化を跡づけた。

そのモチーフの変化と方法の変化は、梶井基次郎の作風の意外な多彩さを強調することになったが、同時に、その多彩さを貫く方法意識を作家自らいう「リアリスチック・シンボリズム」の語に集約して考察した。この語を『冬の日』冒頭に登場する比喩を多用した文体、外界の描写を内面の象徴とする文体に限らず、梶井基次郎の作風全体を示すものとして理解するとき、それは日本の「自然主義」を名乗った理念、主客合一的な理念に基づいて、「生」の具体的な経験や味わいを象徴的に描きだす流れを受け継ぎながら、しかし、明治末から大正期にかけて支配的な傾向であった内面の一方的な表出という表現の理念を脱して、作品を読者の鑑賞に対する言語的な世界として構築するという方法意識の強い、その意味で「昭和モダニズム」の一翼に位置づけられるものとなる。これが、本論における梶井基次郎の文芸史的な位置づけに関する基本的な見解である。

6、注及び研究ノート

しかし、『梶井基次郎　表現する魂』は、あくまでも一般向けの文芸書として書いたものであり、典拠や判断の根拠を一々指摘していない。また、詳しい論議や先行研究に対する議論は

極力省略してある。本論にあたる評伝の研究論文としての不備を「注及び研究ノート」で補う。のみならず、「注及び研究ノート」では、鈴木の文芸研究の方法、近・現代文学史の書き換えのストラテジーを簡潔に示し、梶井基次郎評価の変遷を追い、また梶井基次郎の作品群が及ぼした戦中、戦後の作家への影響を具体的指摘、これまでの梶井基次郎評価に決定的な役割を果たしてきた観念、たとえば「私小説」の観念、について、その歴史的な変化を洗い直し、既存の評価軸を歴史的に相対化する作業を行った。これは、本論における作品評価の正当性を裏付けるものであると同時に、大正・昭和期の文芸作品全般の評価と研究の観念枠に変革を促し、日本の現代文学史の書き換えに資するものとなるはずである。

（論文審査結果）

鈴木貞美氏の論文「梶井基次郎研究」は単行本として1996年に刊行された著書『梶井基次郎・表現する魂』(新潮社)を本論とし、これに400字原稿用紙約800枚分に相当する「注及び研究ノート」と副論文その他をそえて提出されたものである。本人は20年前(1979年)にすでに『転位する魂梶井基次郎』として一冊の梶井論を出版しており、それ以後も幾多の論文また著書によって梶井およびその周辺に関する文学史・文化史的研究を深めてきたが、本論文はそれらすべてを総括して完成させた作品中心の一作家の評伝といってよい。梶井基次郎（1901－1932）の生涯は短かく、作品は20数篇の短篇小説のみである。だが彼は若年の日からの膨大な量の日記、書簡、ノート、また習作を後に残し、同時代の友人や作家たちの証言も多い。鈴木氏はそれらのすべてを周到に調査し（新発見資料をも多々含む）吟味し、関係者に直接に聴取もし、個々の作品についてはもちろん犀利な読みを施して、梶井という大正日本の一青年詩人の「魂」がゆきつもどりつしながら徐々に発展し、自己を把え、ついに感覚や想像をも含めた自己の意識の経験をいわば「魂の事件」として表現するに至るまでの過程とその成果を綿密にあざやかに記述した。芭蕉やボードレールなど内外の古典、明治大正の日本の作家・詩人からの感化、それらを通じて同時代を貫く「生命主義」思想の梶井における内在化などの指摘も的確で鋭い。日露戦争後の日本社会の変化とのかかわりをしばしば論じながらも、その歴史把握がやや陳腐との批判、個々の作品の文体のさらに徹底した分析を求める意見などもあった。だが、審査委員全員は本論文が、従来の流派分類（「自然主義」「幻想文学」「私小説」「純文学」等々）による文学史の枠を打ち破って、作家の内面の生成と作品における表現の創出とをよく結びつけて論証しながら、なお近代日本における文学的「モダニティ」の成立を十分に描きつくした研究であることを高く評価し、これが博士(学術)の学位を受けるに値するものであると認定した。